

# 海外短期英語研修を通じた学びと進路選択への影響 —渡航前・修了1か月後の調査と研修修了1年後の追跡調査から—

佐々木 良造

## 要 旨

本稿は、教養教育基礎科目「海外短期研修」の一部として行われた、カナダのビクトリア大学における1か月の英語研修に参加した学生1名を対象として、異文化理解・語学・学業・進路選択の態度にどのような変化が生じたかを明らかにすることを目的とし、渡航前、研修修了1か月後、研修修了1年後の3回にわたってPAC分析を行った。その結果、渡航の前後で英語学習に対する動機の高まりと異文化理解の深化がみられた。そして、研修修了1年後の調査では、英語学習、留学に対する動機は高まりつつも、リエントリーショックおよび専門の勉強に対するモチベーションの低下とその回復という相容れない状態が続いていたこと、さらにその状態から自力で脱出し、海外志向・上昇志向を形成している様子が明らかになった。このことから、研修後の長期にわたるフォローアップの必要性を指摘した。

【キーワード】：海外短期研修，PAC分析，異文化理解，フォローアップ

## 1 はじめに

近年、日本人学生の留学者数が減っていると言われてきたが、独立行政法人日本学生支援機構（以下、JASSO）の調査「協定等に基づく日本人学生留学状況及び協定等に基づかない日本人学生留学状況（在籍大学等把握分）の合計」によると、日本人学生留学者数は平成25年度が69,869人、平成26年度が81,219人、平成27年度が84,456人と増加傾向にある（表1参照）。

表1：協定等に基づく日本人学生留学状況及び協定等に基づかない日本人学生留學生数

	1か月未満	1か月以上 3か月未満	3か月以上 6か月未満	6か月以上 1年未満	1年以上	不明	計(人)
H25年度	40,527	7,615	7,325	12,450	1,713	239	69,869
H26年度	48,853	8,418	8,670	13,198	1,650	430	81,219
H27年度	51,266	8,028	9,642	13,115	1,913	492	84,456

留学期間は、滞在期間が1か月未満の留学者数がもっとも多い。平成25年度は全体の約58%にあたる4万人強、平成26年度は約60%にあたる4万9千人弱、平成27年度も約60%にあたる5万1千人余りが、アジア・北米・ヨーロッパ等に滞在期間1か月未満の留学をしている。この3年間での留學生数の増加も1か月未満の留学者数がもっとも多い。

滞在期間が短い留学の場合、3か月以上、6か月以上と相対的に滞在期間が長い留学と比べて、留学の成果は期待できないのではないかという懸念がある。近年、滞在期間が短い留学の成果をインタビューや意識調査によって検証しようとする試みがある。本研究もこうした研究と目的を同じくしている。すなわち、滞在期間が短い留学の成果・影響を明らかにすることにある。

留学の成果・影響に関する先行研究は、足立（2015）が以下の3つのタイプに分類している。

(a) 成果探索型

帰国後のインタビューや報告書を分析し、どのような学びがあったかを探る。

(b) 特定領域型

語学や異文化理解、自己成長といった特定の領域に着目し、その領域における学びの度合いを詳しく調べる。

(c) 多種項目設定型

学業、語学、異文化理解、進学・就職、社会人基礎力、異文化間理解力など多くの項目について成果の有無を質問紙により調査する。

滞在期間が短い留学の成果検証を試みた調査のうち、成果探索型の研究として、中橋（2015）があげられる。アメリカのカリフォルニア州の大学での1か月の短期海外研修に参加した理工系大学院生3名を対象に、研修開始前・研修中・研修後にPAC分析を行い、参加学生の意識（異文化理解、アイデンティティ、ネットワーク等）の変化とその影響の要因を明らかにすることによって、海外短期研修の効果と検証を試みている。調査の結果、「視野の拡大」、「異文化理解」、「ネットワークの拡大」、「自身の能力の把握と成長」、「プレゼンテーション力」、「人間力（積極性・主体性・自信等）」の実感が留学の効果としてあげられている。

特定領域型の研究としては、徳井（2002）があげられる。徳井（2002）は、アメリカのユタ大学で行われた1か月の夏季英語研修プログラム参加者17名を対象に、事前と事後にコミュニケーション意識と相手国へのイメージのアンケート調査を行った。調査の結果、米国人のイメージが否定的なイメージから肯定的なものへと変化し、コミュニケーション意識については、外国人と話す際のストレス、不安や苛立ち、心配が減少し、落ち着きが増加したことが報告されている。

多種項目設定型の研究として、野水・新田（2014）があげられる。野水・新田（2014）は留学した学生自身が留学経験をどう捉えているか留学の意義や効果を明らかにするため、JASSOの平成23・24年度留学生交流支援制度の奨学金支援を受けた学生を対象にアンケート調査を行った。ショートビジットプログラム（留学期間3か月未満のプログラム）に参加した学生（回答人数27,139人）、短期派遣プログラム（3か月以上1年未満）に参加した学生（同4,123人）を対象としたアンケート調査の結果、以下のような傾向を見いだしている。

ショートビジットプログラムに参加した学生は、

- (1) 高学年の参加者は「専門分野の知識習得」、「海外の学問の水準や方法の理解」、「外国語での研究発表や議論の仕方の向上」、低学年の参加者は「語学への勉強のモチベーション向上」、「語学力の能力が向上」、「学業成績の向上」、「自らやるべき課題を見つけて率先して取り組むことができるようになったこと」
- (2) 留学・研修期間が長い（2週間以上）ほど「語学力の向上」、「学業成績の向上」、「困難を自力で乗り越える力量の向上」
- (3) 北米・西ヨーロッパ・オセアニアへの留学では「語学力の向上」、「外国語で発言する勇気や慣れ」

を実感しているという。一方、短期派遣プログラムに参加した学生には、上記(1)から(3)に加え、

- (4) 高学年の参加者は(1)に加え「専門の勉強へのモチベーションの向上」
- (5) 期間が長い（6か月以上）ほど(2)の項目に加えて、「留学先国の学生・社会人との

交流を通じた人間観理解]、「留学先国に関する知識の獲得」,「将来の方向性をつかむきっかけ」,「日本文化・日本人としての自分についての意識向上」,「外向き志向（国際志向性）の高まり」

を実感している。また、ショートビジットプログラム参加学生には見られない短期派遣参加学生の傾向として、「異文化間コミュニケーション力」,「日本人の自覚の向上」,「進学・就職についての意識の向上」,「視野の拡大,海外の人間関係・人脈の構築」をあげている。

中橋（2015）は事前・事中・事後に、徳井（2002）は事前と事後に、野水・新田（2014）は事後のみ調査を行っている。野水・新田（2014）は、帰国後の成長を明らかにするためには、留学する前と比べて何がどれだけ変化したかを論じる必要がある、また、留学の効果や影響は、帰国直後だけではなく、進路選択や就職活動、社会人として活躍する中で表れてくると述べている。大学生にとっての進路選択とは、研究室の配属が決まる2年次あるいは3年次、つまり1年次に留学を経験した者であれば1年後ないし2年後のフォローアップ調査が必要だということになる。また、就職活動は3年次から4年次かけて行われるため、2年後、3年後のフォローアップ調査を行う必要がある、ということになる。

## 2 本研究の目的

中橋（2015）や野水・新田（2014）の研究から、滞在期間が短い留学の場合、留学経験者は留学修了後には異文化理解や人間力という点で効果を感じていることがわかっているが、進路選択や就職活動に及ぼす効果や影響はあまりみられない。また、野水・新田（2014）の指摘する長期的な視点での留学の効果・影響は年単位でのフォローアップが必要である。そこで、本研究では、留学の事前事後には、母文化と異なる文化の尊重・受容、母文化と異なる文化の相対化という視点からの異文化理解を中心とし、1年後の調査では、進路や就職に関する留学の効果・影響について調査を行う。次節で詳しく述べるが、調査可能な対象者が6名であったことから、量的な調査ではなく質的な調査を行った。

したがって、本研究では滞在期間が短い留学の成果・影響を、長期にわたって個人のレベルで明らかにすることを目的とする。

## 3 調査について

本研究の調査対象者は、筆者の担当する平成26年度教養教育基礎科目「海外短期研修」の受講生6名のうち、調査協力依頼に応じた2名である。「海外短期研修」は、カナダにあるビクトリア大学英語研修センターのマンスリープログラムへの短期英語研修（毎年9月）の前後に本学で研修を行うブリッジ型の海外短期研修プログラムである。調査協力者2名は共に理系の男子学生で、「海外短期研修」受講時、学部1年生と2年生であった。本稿では、紙幅の都合上、学部1年生の学生Aの調査について述べ、2年次の学生Bを対象とした調査については稿を改めることとする。

調査対象者の母数が6名、調査対象者が2名であることから、量的な調査は行えないため、質的な調査を行うことにした。「海外短期研修」参加の動機・目的は個々人で異なり、研修先での経験や学びも一様ではない。また、調査対象者によって異なる経験を、調査実施者の予断を交えずに語ってもらうために、調査実施者が介入せず、調査対象者自身による操作的な手続きに

よって進める必要がある。

これに加え、経験したことがないことについて調査対象者自身が認知の構造を論理的に認識したり、調査対象者がふだん意識しない潜在的な部分を言語化したりすることは困難な場合がある。このような場合、論理的でない自由な連想からスタートし、類似度を考えさせ、類似度評定を用いたクラスター分析の結果を調査対象者と調査実施者が、現象学的立場から共に問題を共有するという方法が有効な場合がある（土田 2017）。

対象者が 1 名でも実施することができ、調査対象者がふだん意識しない潜在的な部分をも、調査実施者の予断なく語ってもらうために、本研究では内藤（1997）によって開発された PAC（Personal Attitude Construction, 個人別態度構造）分析を用いることとした。

### 3.1 PAC 分析について

PAC 分析の手順は、以下の通りである（内藤 1997）。

- (1) 当該テーマに関する自由連想
- (2) 連想項目間の類似度評定
- (3) 非類似度距離行列によるクラスター分析
- (4) 調査対象者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告
- (5) 調査実施者による総合的解釈

手順 (1) から (3) は、土田（2017）が作成した PAC 分析支援ソフト「PAC-assist」（ver. 20070801）を利用した。Microsoft 社の表計算ソフト Excel 上に「PAC-assist」が表示した画面の指示に従って、調査対象者が自由に連想したことをキーボードで入力（図 1 参照）し、連想項目間の類似度評定を 10 段階で行い（図 2 参照）、非類似度行列を作成するソフトウェアである。「PAC-assist」で作成された非類似度行列から、統計分析ソフト R（ver.3.4.3）を用い、「(3) 非類似度距離行列によるクラスター分析」と樹形図を作成した。手順 (4) の間、調査実施者は質問や確認はせず、調査対象者の報告が全て終わった後で補足の質問や確認を行った。

このように、PAC 分析は刺激文による連想とその入力、連想項目同士の類似度評定を調査対象者自身が行い、クラスター分析の結果も調査対象者の語りを中心となっているため、手順 (1) から (4) の間、調査対象者の操作ミスや操作に関する質問、クラスター構造のイメージや解釈の報告後の補足質問・確認の時以外、調査実施者が関与する場面はほとんどない。

### 3.2 調査時期と調査内容

調査は、海外短期研修渡航前約 1 か月（2014 年 8 月）、海外短期研修修了後約 1 か月（2014 年 10 月）、海外短期研修修了後約 1 年（2015 年 10 月）にわたって 3 回行った。

調査 1 は、研修渡航前約 1 か月（2014 年 8 月）に、研修修了後 1 か月の調査 2 との比較を前提として行った。また、学生 A は低年次の学生であることから、異文化理解・語学・学業・進路選択のうち、現地での経験が反映されるであろうことが考えられる異文化理解を中心に調査を行うこととした。PAC 分析の刺激文は、「あなたは、海外短期研修のホスト文化についてどんな印象を持っていますか。ホスト文化の流行・ファッション・食べ物だけでなく、ホスト文化に属する人の価値観・信念やホスト文化の歴史について、思い浮かべた印象や言葉を思い浮かんだ順に入力してください」とした。

	A	B	C	D	E
1					
2	テーマ				
3	あなたは、海外短期研修のホスト文化についてどんな印象を持っていますか。ホスト文化の流行・ファッション・食べ物 だけでなく、ホスト文化に属する人の価値観・信念やホスト文化の歴史 について、思い浮かべた印象や言葉を思い浮かんだ順に入力してください。				
4					
5	想起順		自由連想語(文) 想起順に上から記入	順位	プラス(+), プラマイゼロ(0), マイナス(-)
6	1		アメリカよりも穏やかそう	9	-
7	2		自然がきれい	5	+
8	3		涼しそう	7	+
9	4		日本よりゆったりした環境だと思う	3	0
10	5		休日の過ごし方がイメージがわからない	8	-
11	6		人が優しそう	1	+
12	7		先進国で、世界において比較的富裕層	12	0
13	8		英語が早そう	10	0
14	9		治安がよさそう	2	0
15	10		街並みが美しそう	4	+
16	11		歴史的に戦争がなく平和	13	+
17	12		代表的な料理が思い浮かばない	11	-
18	13		日本人の渡航者も比較的多そう	6	+
19	14				

図 1：当該テーマに関する自由連想の提示と連想項目の入力

類似度比較

右と左の言葉(文章)を比較して、類似度に応じてスライダーを左右に動かしてください。  
似ている(関連が深い)場合に右→へ、似ていない場合には左←スライダーを移動させて、適当と感じるところで止めて「次へ」のボタンを押してください。

残り比較数  
156

歴史的に戦争がなく平和

自然がきれい

似ていない  
関連性がない

似ている  
関連性が強い

一つ前に戻る

次へ

図 2：連想項目間の類似度評定

調査 2 は、海外短期研修修了 1 か月後（2014 年 10 月）に行った。調査 1 と比較するため、PAC 分析の刺激文は調査 1 と同じ刺激文とした。

調査 3 は海外短期研修修了約 1 年後の 2015 年 10 月に行った。調査方法は調査 1、調査 2 と同じく PAC 分析を用いた。刺激文は、海外短期研修の進路選択や就職活動への影響があるかどうかを明らかにするため、「あなたのキャリアデザインは、渡加前の研修、ビクトリア大学での英語研修と渡加中の経験、帰国後の研修および渡加に関連した経験を通じて、どうなりましたか。頭に浮かんだイメージや言葉を思いついた順に入力してください」とした。

#### 4 PAC 分析の結果と総合的解釈

本節では、調査 1、調査 2、調査 3 の結果を述べる。各調査ともクラスターごとに学生 A による報告、調査実施者からの補足質問、調査実施者によるクラスターの命名の順に述べ、各調査ともすべてのクラスターの報告・命名が済んだ後、調査実施者による総合的解釈を述べる。本文中、連想項目を全角大括弧（〔 〕）で、クラスターの名前をすみ付き括弧（【 】）で示す。クラスターの報告で学生 A の語りに表れた表現・語句を鍵括弧（「 」）で示す。なお、クラスター名は調査実施者が命名した。また、各図の連想項目の下にある数字と記号は、想起順、重要度、イメージ（+、-、± 0）を表している。連想項目が肯定的なイメージである場合には「+」を、否定的なイメージには「-」を、肯定的でも否定的でもないイメージには「± 0」を付すよう指示した。例えば、図 3 の一番上の連想項目「日本人の渡航者も比較的多そう」の下にある「4,3, ± 0」は、「想起された順番が 4 番目、重要度が上から 3 番目、イメージは ± 0」であることを示す。

##### 4.1 調査 1（渡航前）の結果

図 3 に学生 A の渡航前のデンドログラムを示す。刺激文から連想された項目は 13 項目、項目間の類似度評定によるクラスター分析のデンドログラムは、調査実施者が提案したとおり 4 つのクラスターに分けられた。

###### 4.1.1 学生 A によるデンドログラムの報告および調査実施者によるクラスターの命名

「日本人の渡航者も比較的多そう」、[自然がきれい]、[治安がよさそう]、[歴史的に戦争がなく平和] の 4 つの連想項目が 1 つのクラスターを形成している。このクラスターで学生 A はカナダの全体的なイメージについて述べている。「あまり厳しくない」、「自然を保全する」、「日本人の渡航者も比較的多そう」なイメージから「あまり身構えなくても比較的行きやすいところ」だと思ったという。これらのイメージは「僕からあるいは日本人からとかから見て、行きやすさ、行くときの障壁の高さ」というイメージに集約されると述べている。このクラスターの名前は【敷居が低い国】とした。

次のクラスターは「人が優しそう」、[アメリカよりも穏やかそう]、[街並みが美しそう]、[日本よりゆったりした環境だと思ふ]、[休日の過ごし方のイメージがわからない] という 5 つの項目がクラスターを形成している。このクラスターは、「自分の描いたピクチャー」に見られるカナダのイメージを述べている。「自然」、「美しい景観」はよく浮かんでくるが、「人が生活している感じが想像できない」ので、「人がガツガツしているイメージのあるアメリカ」のような「生活感」がないイメージを持っているという。これまで見たカナダの写真は美しい自然のものが多く、その写真から「穏やかな空間をイメージし」、「そこにいる人は穏やかであるだろう」という推測から「人が優しそう」というイメージが連想されたという。このクラスターは「自分がほんとにカナダに行きたいかどうかについての率直な意見」であると述べている。このクラスターは、+、-、± 0 のイメージの連想項目で形成されていることから【期待と不安】と命名した。

その次のクラスターは「先進国で、世界において比較的富裕層」、[英語が早そう] の 2 つから形成されている。このクラスターは「先進国ってどうか、カナダが世界的に見てわりと富裕層側にある」と、「英語が早いって言うのを聞く」のがリンクしているという。「僕って（中略）富裕層だけじゃなくて、困っている人とかにも目を向けていきたい」、「いろんな貧しい国とかいろんなことを知りたいので、先進国のことももちろん勉強したいので」カナダの国際的な位置を示す指

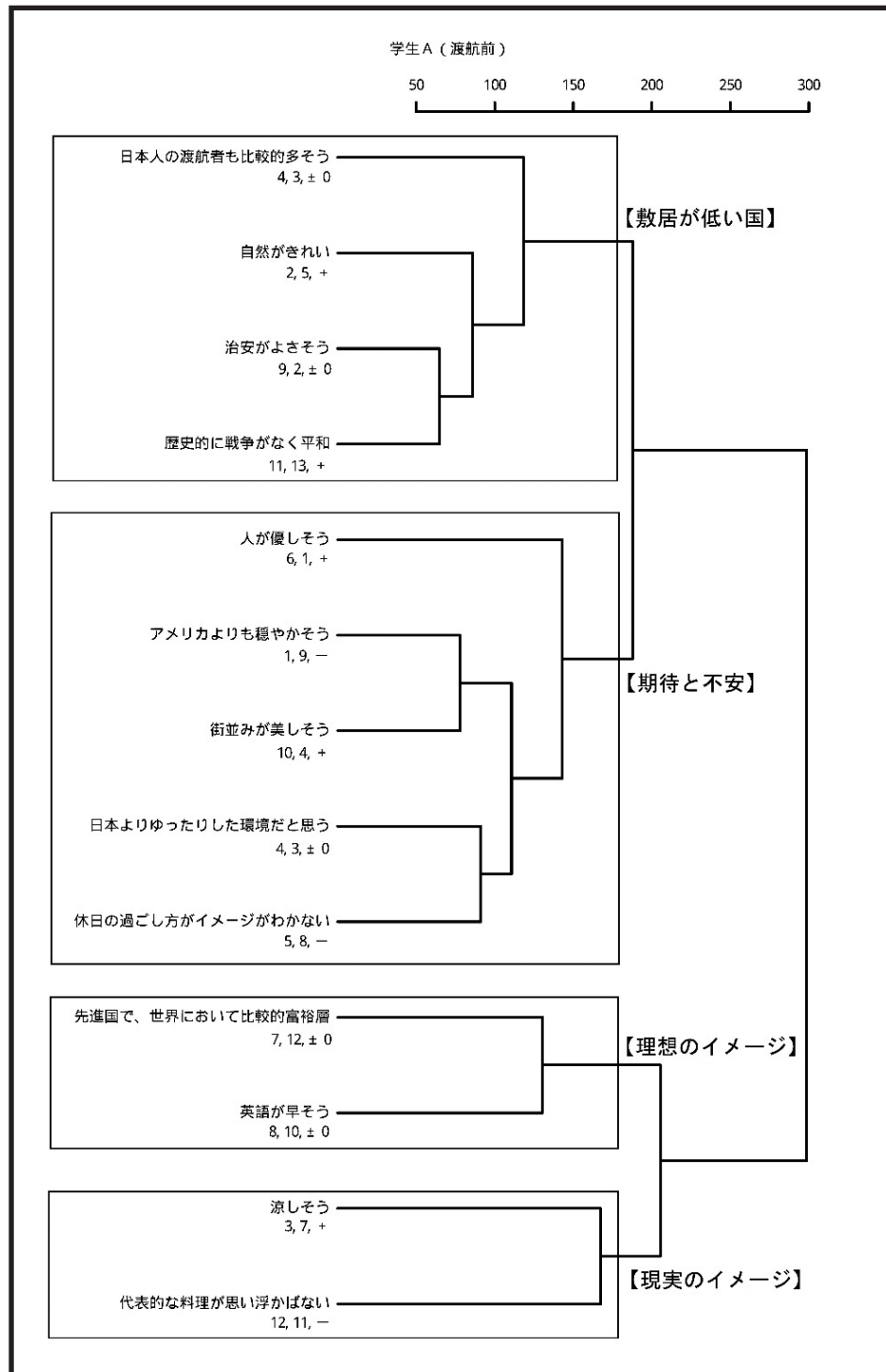


図 3：調査 1 (渡航前) の学生 A のデンドログラム

標のようなものだという。このクラスターは【理想のイメージ】とした。

最後のクラスターは [涼しそう], [代表的な料理が思い浮かばない] の 2 項目からクラスターが形成されている。このクラスターの [涼しそう] は「昔から持っているイメージで単純に今だと過ごしやすそうだなんていうプラスの意味になってしま」い、「ごちゃごちゃしているのとは対照的なイメージ」だという。[代表的な料理が思い浮かばない] のは「カナダに行くって言ったときに、カ

ナダって何があるの、って聞かれて、メープルシロップぐらいしか答えられない」ことから、「あんまりモノがないみたいな感じなイメージ」で「にぎやかとは逆のベクトルのイメージ」という「ごちゃごちゃしていない」イメージがまとまっているという。このクラスターは【現実のイメージ】とした。

補足質問として、[アメリカよりも穏やかそう] がマイナスイメージなのはどうしてかと尋ねたところ、A は大学に入ってから様々な人に会うたびに学ぶことがある反面、自分が何も知らないことに気づかされるという。「目に飛び込んで来るものすべてで勉強したいというか、なんか、焦っているのかもしれない」という自分にとって、穏やかな状態に対する不安が表れているという。他に補足することはないか尋ねたところ、[休日の過ごし方がイメージがわからない] という連想項目について「いかに多くのことを吸収できるのか、それがすごく自分の中でも楽しみな反面、何が何でも吸収してこなきゃっていう焦りもあるので、そこの心配があります」と補足した。

#### 4.1.2 調査 1 の総合的解釈

【敷居が低い国】から、カナダは受け入れられやすい国だとイメージしている一方、【期待と不安】が学生 A の中に同居しており、[アメリカよりも穏やかそう]、[休日の過ごし方のイメージがわからない] という連想項目から穏やかな状態に対する不安、「何が何でも吸収してこなきゃ」という焦りが読み取れる。多くのことを学びたい、吸収したいという期待をカナダでの研修に寄せているのに対し、自分がそこで何をするかイメージがわからない項目にマイナスイメージがついていると考えられる。また、「本当に（カナダに）行きたいかどうかの率直な意見」と述べているように、渡加への期待と不安が入り交じった気持ちが表れていると考えられる。豊かな先進国であるカナダと[英語が早そう] に示されるスピード感が表れているのが【理想のイメージ】であると考えられる。【現実のイメージ】で[涼しそう] はプラスイメージと評価しているが「昔から持っているイメージで単純に今だと過ごしやすいかなっていうプラスの意味になっ『てしまう』」の「てしまう」という文末表現から【現実のイメージ】は必ずしもプラスイメージであるとは捉えていないと考えられる。[代表的な料理が思い浮かばない] のも「あんまりモノがないみたいな感じなイメージ」で【現実のイメージ】は【理想のイメージ】と対照的なカナダのイメージが表れていると考えられる。加えて、連想項目の文末に「そう」「と思う」という言語形式が使われている。こうした表現からも、カナダのイメージは実感を伴わない想像の範囲のものだと考えられる。

## 4.2 調査 2 の結果

図 4 にデンドログラムを示す。刺激文から連想された項目は 13 項目、項目間の類似度評定によるクラスター分析のデンドログラムは、調査実施者が提案したとおり 5 つのクラスターに分けられた。

### 4.2.1 学生 A によるデンドログラムの報告および調査実施者によるクラスターの命名

まず、[人が優しい]、[家がきれい]、[交通の便が良い]、[イギリス文化]、の 4 つがクラスターを形成している。[人が優しい] と感じたのは「英語を喋れない人に対してすごく寛容」なカナダ人と接し、「日本の教育よりも親身なんじゃないかと思うぐらいすごく優しい」大学の先生と接したからだという。[家がきれい] に建っていて「環境が充実してい」て、[交通の便が良い] ため「先進国」という印象を持っている。そして、[イギリス文化] は「移民がたくさん来た時の名残り」や「イギリス文化を感じ」ているという。カナダの環境と人に実際に接してみて「住みやすい」と感じたことと述べていることから、このクラスター名は【住みやすい国カナダ】とした。



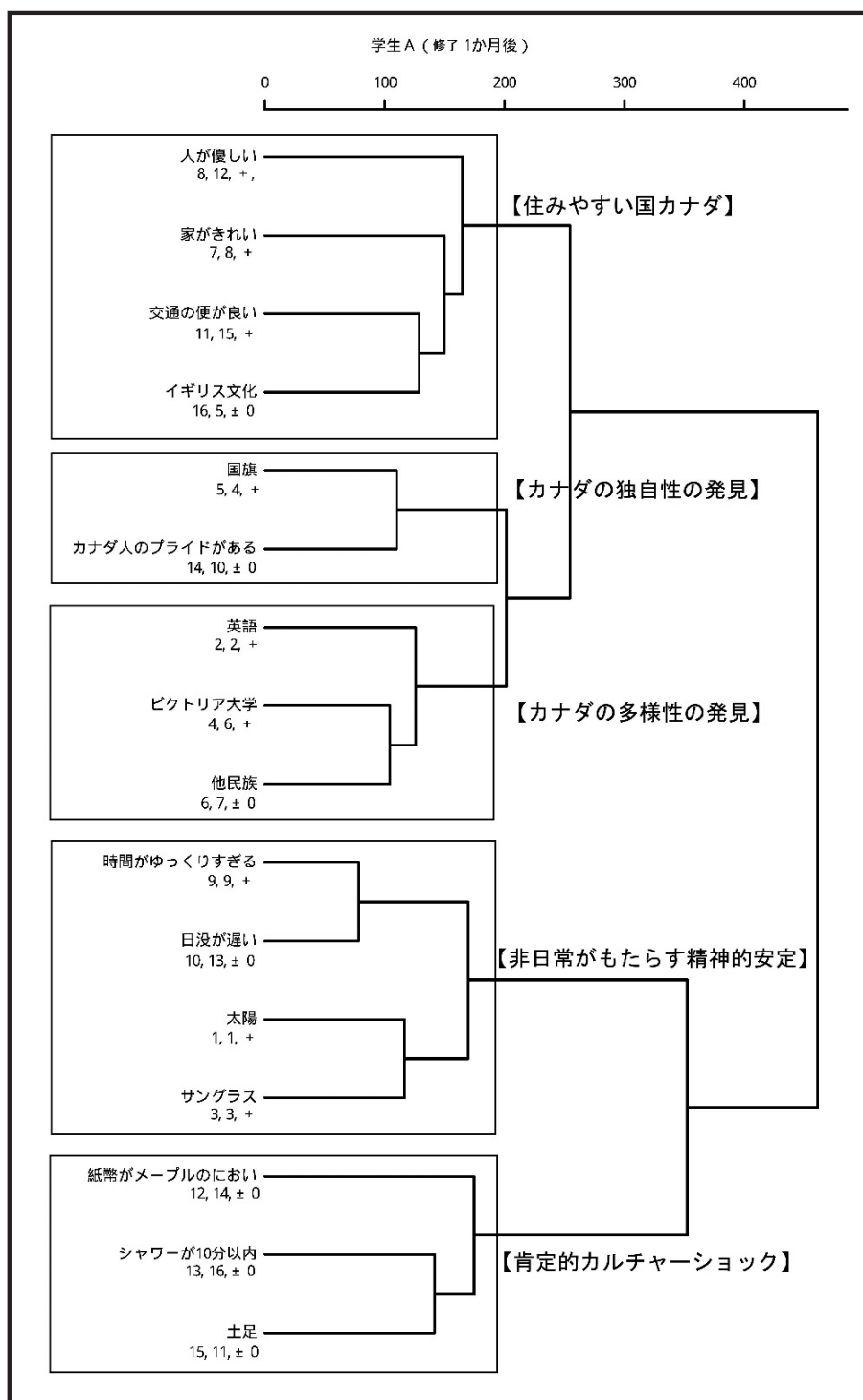


図 4：調査 2 (修了 1か月後) の学生 A のデンドログラム

次のクラスターは「国旗」と「カナダ人のプライドがある」の2つから形成されている。カナダに行く前のイメージは、場所が「アメリカの上にある国」で「アメリカを真似て」「アメリカについていく」イメージがあったが、英語研修の授業の中で、実際はカナダ人であることに誇りを持ち、「国旗」に誇りを持っていることを知った。また、英語の授業でカナディアンビールのテレビコマーシャルを見て「カナディアンプライド」を強く感じたという。このクラスターは、これらが「ふたつ合わさっ

た」クラスターであるという。このクラスター名は【カナダの独自性の発見】とした。

3つ目のクラスターは[英語],[ビクトリア大学],[他民族]の3つの連想項目から成っている。まず、「他民族」は「多民族」の誤変換であるとの報告あった(以降,本稿では「多民族」と表記する)。アメリカやカナダが「移民の国」で「人種のサラダボウル」と言われるのをビクトリア大学でのキャンパスライフで実感した。こうした人々が「1つの場所に集まって話す」ための「公用語」,あるいは「壁をなくす言語としての英語」の必要性を感じたという。このクラスター名は【カナダの多様性の発見】とした。

4つ目のクラスターは[時間がゆっくりすぎる],[日没が遅い],[太陽],[サングラス]の4つの連想項目から形成されている。「ゆっくりすぎるというか,1か月がすごく心地良くて,あまり他の余計なことを考える必要がなかった」。そして,この1か月間は「ほんとに雑念がなく」「すごく落ち着いた精神状態で過ごせた」という。[太陽]と[サングラス]は「体感時間がゆっくりである」こと,「日がなかなか沈まない」ことの象徴として連想されたという。「バタバタしたり,余計なことを考えてしまう」日本とは全く違った,という意味で4つの連想項目が1つのクラスターを形成していると報告している。このクラスターは【非日常がもたらす精神的安定】と命名した。

最後のクラスターは[紙幣がメープルのにおい],[シャワーが10分以内],[土足]から成っている。[紙幣がメープルのにおい]は,「プラスチックのすごく綺麗な紙幣でアメリカのぼろっちいのと全然違って」,「(紙幣の)1か所からメープルのにおいがするところ」があり「結構,自分の中でびっくりして印象に残っていた」という。「シャワーが10分以内」というルールは,ビクトリア大学のオリエンテーションでもホストハウスに入ってから同じことを言われ,「自然がすごく充実しているように見えるのに,水は使っちゃいけない」ことに「結構考えさせられた」という。[土足]は「初めての海外だった」ので「違和感を感じた」。[土足]も[シャワー10分以内]も「ある意味カルチャーショック」だったという。

最後のクラスターについて,学生Aは他の連想項目とあまり関連性がないというが,「紙幣がメープルのにおい」も「自分の中でびっくり」していることであり,「シャワー10分以内」と「土足」は「カルチャーショック」だったと述べていることから,4つめのクラスター【非日常がもたらす精神的安定】の精神的な面で関連性があると考えられる。「自分の中でびっくり」し,「カルチャーショック」を受けてはいるものの,これを否定的に捉えているコメントはなく,むしろ新鮮な驚きとして受け入れているように思われる。どれも日本では経験しない「カルチャーショック」が共通して現れており,新鮮な驚きとして肯定的に捉えていると考えられることから,このクラスター名は【肯定的カルチャーショック】とした。

最後に,学生Aはビクトリアでの1か月が「別世界にい」て「充実していた」という。スケジュールがタイトな日本と比べてビクトリアの生活は「時間の縛りがそこまでな」かった。大学の授業のスタイルについては「教えるっていうよりは,先生はあくまでマネージャーみたい」で「基本的には生徒同士に話し合わせたりできる雰囲気」が「こっちではできない」経験で,「ビクトリアに帰りたい」と述べている。

#### 4.2.2 調査2の総合的解釈

【住みやすい国カナダ】はビクトリアの街並み,接した人々といった生活環境から,【カナダの独自性の発見】と【カナダの多様性の発見】はビクトリア大学英語研修センターにおける学習環境からイメージされた「カナダ」だと考えられる。【非日常がもたらす精神的安定】はビクトリアの

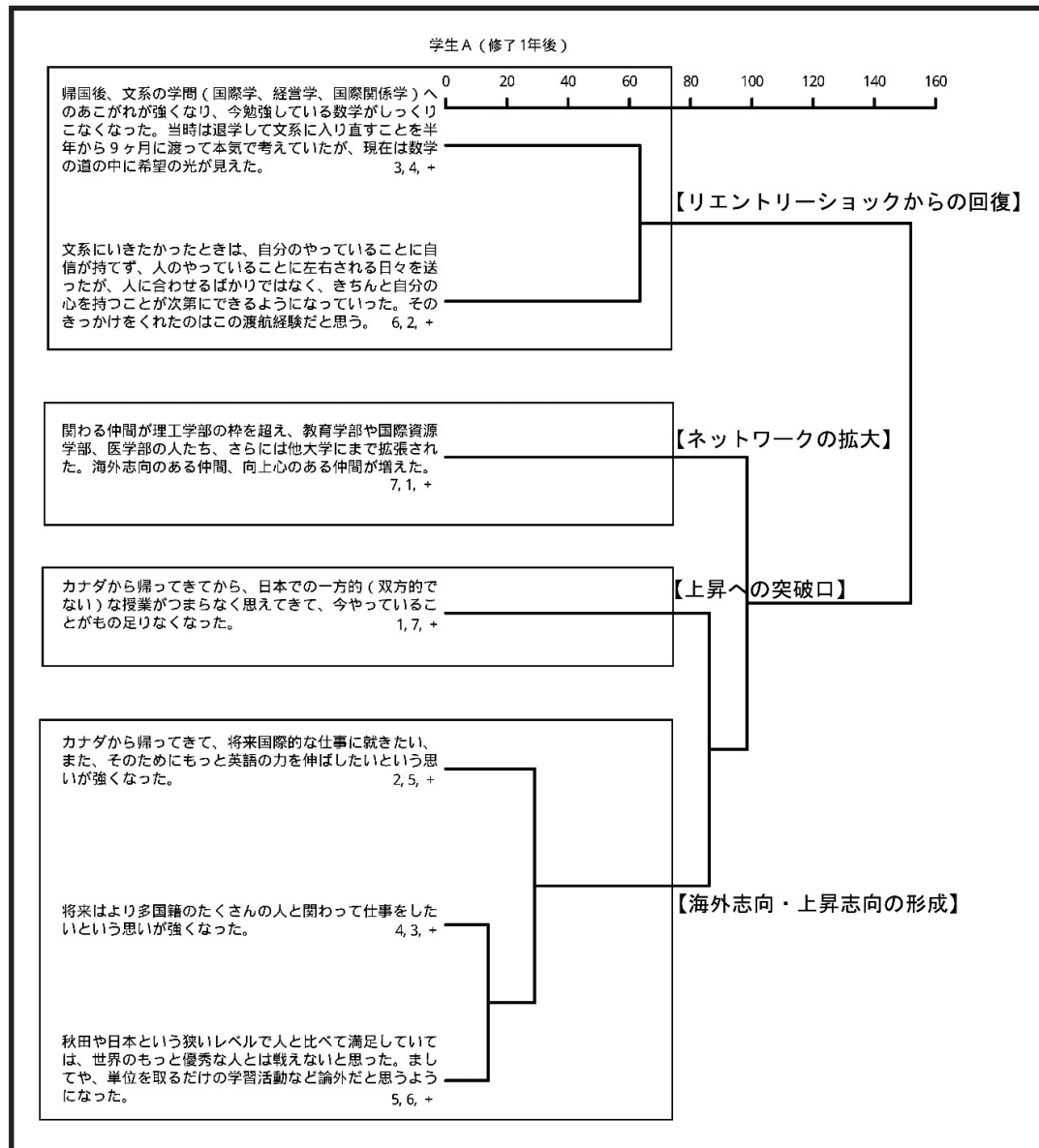


図5：調査3(修了1年後)の学生Aのデンドログラム

地理的環境が象徴的に連想されているが、その内容はカナダでの時間の感じ方と日本のそれとの違いが、非日常であるカナダからもたらされる精神的安定であると解釈することができる。【肯定的カルチャーショック】は、外界からの刺激によって気づかされたカナダと日本との違いであると解釈することができる。総じて、カナダの住環境、カナダ人の価値観、学習環境、時間の流れ方のいずれも肯定的に捉えられており、カルチャーショックでさえも肯定的に捉えられている点が興味深い。また、アメリカの紙幣を「ぼろっちい」と評価しているのも興味深い点である。

#### 4.3 調査3の結果

図5に学生Aのデンドログラムを示す。刺激文から連想された項目は6項目、項目間の類似度評定によるクラスター分析のデンドログラムは、調査実施者が提案したとおり4つのクラスターに分けられた。

#### 4.3.1 学生 A によるデンドログラムの報告および調査実施者によるクラスターの命名

最初のクラスターは、[帰国後、文系の学問（国際学、経営学、国際関係学）へのあこがれが強くなり、今勉強している数学がしっくりこなくなった。当時は退学して文系に入り直すことを半年～9ヶ月に渡って本気で考えていたが、現在は数学の道の中に希望の光が見えた]、[文系にいきなかったときは、自分のやっていることに自信が持てず、人のやっていることに左右される日々を送ったが、人に合わせるばかりではなく、きちんと自分の心を持つことが次第にできるようになっていった。そのきっかけをくれたのはこの渡航経験だと思う]の2つのクラスターから形成されている。

帰国後、学生 A は日本の「一方的な授業」とカナダの「双方向的な授業」を比べて、「一方的な授業」は「つまらない」と思えるようになったという。また、英語で学びたいという欲求が強くなり、「今やっている数学はずっと机に向かって、このまま勉強してどうなんだろう」、「他のところがいいなあ、って思っているうちに自分に自信が持てなくなった」という。一方、「数学の勉強して何の職業になれるんだろう」という悩みがあったが、英語が話せて数学を勉強していることに対して周囲の人々、特に留学生が「ふたつの武器みたいな感じに理解してくれた」ことで、現在の自分に自信が持てるようになり、「英語ができるだけがすべてじゃない」と考えられるようになったという。日本の大学の授業についても、一方的で双方向的でないことに不満を持っていたが、「自分が変える気になれば授業の環境って変えられるじゃん」と思うようになり、「発言したかったらみんなしゃべらなくても自分で手を上げて先生とちゃんと対話すれば

いいんじゃないか」という態度で授業に参加したところ「意外と先生とのつながりが生まれ」、「意外と悪くないな」と思うようになったという。そして、「数学の道の中に希望の光が見えた」のは、「数学の勉強して何の職業になれるんだろう」という悩みが「数学をやって得たものとしてどんな形で仕事ができるだろう」という考え方に変わっていき「全体的に考え方が少し凝り固まらなくな」り、「今やっていることでいいんだ」と思えるようになったという。このクラスターは【リエントリーショックからの回復】と命名した。

2つ目のクラスターは「関わる仲間が、理工学部を超え、教育学部や国際資源学部、医学部の人たち、さらには他大学にまで拡張された。海外志向のある仲間、向上心のある仲間が増えた」という1つの連想項目がクラスターを形成している。

学生 A が1年次に参加した「海外短期研修」の受講者は、異なる学部、異なる学年・年齢の受講者がいたため、「年齢の枠や学部の枠を超えて」関わる人が増えたという。そして、カナダでの語学研修では、同じクラスに日本国内の他大学の学生、日本以外からの学生、専門の異なる学生の「違う考え、違う目標」から刺激を受けたという。帰国後は「留学生と一緒にキャンプとかがある授業」や「留学のワークショップで仙台に行ったり」して人と関わっていくようになったという。これは「ビクトリアに行って、人と関わるのって大事だな」と思ったことがきっかけで、「(人との関わりを)増やすとまた友達が増えて、友達が増えたら、あ、これ大事だと思って、そのループが生まれた」と述べている。以上のことから、このクラスターは【ネットワークの拡大】と命名した。

3つ目のクラスターは「カナダから帰ってきてから、日本で一方的（双方向的でない）な授業がつまらなく思えてきて、今やっていることがもの足りなくなった」という連想項目から形成されている。学生 A は、帰国直後「授業中寝ている人もいるし、このままでもいいやって思っている人」に対して、あるいは、「ただ机に座って」いる授業に対して、「不満しなくて物足りなかった」という。しかし、この連想項目をプラスと評価している。その理由は「カナダに行かなかつたら絶対

気づかなかったことで、このステップを踏まなかったら今の自分はないと思っている」からだと言われ、「結果的にすごい大事だった」からだという。このクラスターは【上昇への突破口】と命名した。

最後のクラスターは「カナダから帰ってきて、将来国際的な仕事に就きたい、また、そのためにもっと英語の力を伸ばしたいという思いが強くなった」、[将来はより多国籍のたくさんの人と関わって仕事をしたいという思いが強くなった]、[秋田や日本という狭いレベルで人と比べて満足しては、世界のもっと優秀な人とは戦えないと思った。ましてや、単位を取るだけの学習活動など論外だと思うようになった]という3つの連想項目から形成されている。

学生 A は「実際海外に行ってみて思ったよりも得るものが多かった」という。そして「たくさん悩むきっかけもあったし、たくさん感じることもあった」から「海外に行くってことが何かをくれた」と述べている。そして、「仕事の拠点を海外に持つことによって、多くの人との関わりが生まれる」と考えるようになったという。こうした考えに至るには「外国の人から『数学やってるんだ、どんなことやってるの』っていわれてちゃんと答えられない自分がいたり」、「日本にいたら、すごくしゃべれる人だと思われる。(中略)でも外国に行ってネイティブの人たちとしゃべったら全然しゃべれない」という経験から、「今いる中で1番になるんじゃないくて、外のコミュニティにいったらどうなんだろう」と考えるようになり、「どんどん、外、外、って見ていったら、常に上を目指していける」と考えるようになったと述べている。また、このクラスターについて「外国に行って、たくさんの人と関わることの大事さみたいなのは、ある程度確信みたいなのが変わって、自分の哲学ができてきた」と述べている。このクラスターは【海外志向・上昇志向の形成】と命名した。

#### 4.3.2 調査3の総合的解釈

カナダからの帰国後、現地での「双方向的な授業」に刺激を受けた学生 A は、日本での「一方的な授業」に魅力を感じなくなり、「帰国後、文系の学問（国際学、経営学、国際関係学）へのあこがれが強くなり、今勉強している数学がすっかりこなくなった。当時は退学して文系に入り直すことを半年～9ヶ月に渡って本気で考えていた」という連想項目から、リエントリーショックを受けていると考えられる。学生 A は自身の専門である数学をいかした職に就きたいと思う一方で、海外志向を強く持っているが、数学をいかす職は研究職、海外で働きたかったら「文系の学問（国際学、経営学、国際関係学）」だと職業を限定的にとらえていた。しかし、他者からの「数学と英語」という「2つの武器」を持っているという評価が自信につながり、【リエントリーショックからの回復】を遂げ、「自分を変える気になれば授業の環境って変えられるじゃん」と思うようになった。そして、「数学をやって得たものとしてどんな形で仕事ができるだろう」と考え方を換え、「全体的に考え方が少し凝り固まらなくな」った結果、現状を肯定的にとらえられるようになっていったと考えられる。カナダへの海外短期研修を【上昇への突破口】と捉え直すことができたことが、「海外志向のある仲間、向上心のある仲間」を増やししながら自身の【ネットワークの拡大】を感じつつ、「今いる中で1番になるんじゃないくて」、「どんどん、外、外、って見ていったら、常に上を目指していける」【海外志向・上昇志向の形成】に至ったと考えられる。

## 5 考察

まず、短期留学前の調査1と修了直後の調査2の結果を比較して考察を述べる。次に、調査3の結果から、進路や就職に関する留学の効果・影響について考察を述べる。そして、長期的なフォローアップ調査の必要性を指摘した野水・新田（2014）の結果と比較しながら考察を述べる。

## 5.1 短期留学前後の比較

調査1では、連想項目の文末表現（「優しそう」の「そう」、「と思う」、「イメージがわからない」など）から、学生Aのカナダに関する知識は、本研修にあたって積極的に身につけた知識と言うよりも、教科学習やメディアを通じて得た知識であると考えられる。一方、調査2の【カナダの独自性の発見】、【カナダの多様性の発見】という2つのクラスターが示すように、調査2の連想項目の文末表現は、日常生活を通じた自分自身の経験であることから、連想項目の文末が言い切りの形に変わっている。

そして、調査1と調査2では「穏やか」であることに対する評価が変化している。調査1では、マイナスと捉えていた穏やかさだが、帰国後の調査2では【非日常がもたらす精神的安定】のなかで「時間がゆっくりすぎる」穏やかさをプラスと捉えている。自身が受けたカルチャーショックでさえも肯定的に捉えており、【住みやすい国カナダ】からもわかるように、カナダの文化を肯定的に受け入れていると考えられる。

一方、学生Aは渡航前の調査1の補足質問のなかで「目に飛び込んでくるものすべてで勉強したい」と述べている。調査1は学生Aの大学入学およそ3か月後に行われていることを考えると、多くのことを学びたい、吸収したいという期待を抱いていると考えられる。学生Aは「何が何でも吸収してこなさなきゃ」という貪欲さと同時に焦りを感じているようでもある。学生Aは学ぶ意欲というより、焦燥感のようなものにかかれており、カナダの穏やかなイメージが「いかに多くのことを吸収できるか」を阻む要因ではないかと心配している様子が見えてくる。この焦燥感は調査2には表れず、むしろ、上述の「時間がゆっくりすぎる」穏やかさ、【非日常がもたらす精神的安定】によって消えてしまっているのではないだろうか。

また、調査1では、「アメリカよりも穏やかそう」、「人がガツガツしているイメージのあるアメリカ」のように、アメリカとの比較を通じてカナダを理解しようとしている様子が見えてきた。しかし、調査2の「紙幣がメープルのにおい」について「プラスチックのすごく綺麗な紙幣でアメリカのぼろっちいのと全然違って」（下線筆者）と語っているように、メープルのにおいがするカナダの紙幣を「綺麗」と肯定的に評価し、アメリカの紙幣を「ぼろっちい」と評価している。調査1と調査2ではカナダとアメリカについて学生Aの評価が変化していると考えられる。

## 5.2 進路や就職に関する留学の効果・影響について

留学の影響という観点から考えると、単に海外に英語を勉強しに行っただけの短期研修が、一時期、大学をやめて文系に入り直そうと思ったほど深刻に悩ませるほど影響を与えていたことは、特筆に値するだろう。

学生Aは、「英語と数学の2つの武器」と評されたことをきっかけに自己肯定感がめばえ、進路変更には至らず、どのように「2つの武器」をいかそうかという志向に向かって行ったと考えられる。

そして、「カナダから帰ってきて将来国際的な仕事に就きたい」、「より多国籍のたくさんの人と関わって仕事をしたい」と思うようになり、海外志向が形成され、【ネットワークの拡大】が「秋田や日本という狭いレベルで人と比べて満足しては、世界のもっと優秀な人とは戦えないと思」うようになり、上昇志向が形成されていったと考えられる。

進路選択については、何か将来就きたい職や具体的に何をを目指すかが決まったわけではない。

しかし、【リエントリーショックからの回復】から【海外志向・上昇志向の形成】に至る過程で、一時は大学をやめたいと思っていた困難な時期を自力で乗り越えたことによって、学生 A に人間的成長をもたらしたのではないか。その結果として「今やっていることでいいんだ」という現状を肯定的にとらえる態度に変わっていったのではないかと考えられる。

調査 3 では、短期研修の影響が学業全般に現れている。図 5 の【リエントリーショックからの回復】で学生 A が述べているように、帰国後のある時期、退学して文系に入り直すことを本気で考えていたという。カナダで受けた「双方向的な授業」が日本での「一方的な授業」を「つまらない」と感じさせ、さらに語学として英語を学ぶのではなく、手段として「英語で学びたい」（下線部筆者）という欲求や「ずっと机に向かって」勉強することについての不安を感じていた。

一方で、「英語もできるし数学もできる 2 つの武器」という周囲の人々、特に留学生という他者からの承認が学生 A に自己肯定感をもたらしていると考えられる。この「他者からの承認」の「他者」に留学生が言及されていることが重要であると考えられる。学生 A にとって留学生とは、外国語（日本語ないし英語）に長けており、外国語と自分の専門分野という「2 つの武器」をいかして留学を実践しているロールモデルではないかと考えられる。同じ大学で学ぶ学生という立場にありながら、学生 A が目指す、語学と専門という「2 つの武器」をいかした留学を実現しているロールモデルとしての留学生からの肯定的な評価が、学生 A の自己肯定感につながったのではないだろうか。

そして、【上昇への突破口】で「今やっていることがも足りなくなった」のは「カナダに行かなかったら絶対気づかなかったことで、このステップを踏まなかったら今の自分はないと思っている」と述べているように、留学の効果が表れるのは帰国直後だけではないこともわかった。

### 5.3 野水・新田（2014）の調査結果との比較

本節では、野水・新田（2014）の調査結果に、学生 A の事例を照らし合わせて考察を試みる。第 1 節で述べた留学期間 3 か月未満のプログラム「ショートビジットプログラム」、あるいは 3 か月以上 1 年未満の短期派遣プログラムに参加した学生が実感している点で、学生 A に当てはまると思われる点をあげる。まず、学生 A は帰国後、近隣の他大学の英語で行われる講義を履修しており、これは「ショートビジットプログラム」の参加学生が実感している項目のうち、低学年の参加者の「語学への勉強のモチベーション向上」が当てはまると考えられる。次に調査 3 の【リエントリーショックからの回復】から、「留学・研修期間が長い（2 週間以上）ほど困難を自力で乗り越える力量の向上を実感している」が当てはまると考えられる。そして、「短期派遣プログラム」に参加した学生にみられる傾向だが、学生 A にもいくつか当てはまる点があると考えられる。調査 3 の【海外志向・上昇志向の形成】は「進学・就職についての意識の向上」、「将来の方向性をつかむきっかけ」、「外向き志向（国際志向性）の高まり」が当てはまるだろう。

調査 3 の結果から、「ショートビジットプログラム」より滞在期間が長い「短期派遣プログラム」の参加者が実感している項目に関しても、学生 A に当てはまる点があることは興味深い。野水・新田（2014）の調査では、滞在期間の長さによって留学の効果や影響を論じており、「ショートビジットプログラム」（留学期間 3 か月未満）の参加者より、「短期派遣プログラム」（留学期間 3 か月以上 1 年未満）の参加者のほうが、留学の効果や影響を実感している面が多岐にわたることを指摘している。一方、本論で述べているように、「ショートビジットプログラム」（留学期間 3 か月

未満)に相当する本研修の参加者 A にとっての留学の効果や影響を、長期的な視点で調査すると、「短期派遣プログラム」(留学期間 3 か月以上 1 年未満)の参加者が実感している効果や影響を受けていることがわかる。学生 A は、専門の勉強へのモチベーションが向上しており、将来の方向性をつかむきっかけを得ており、外向き志向(国際志向性)が高まり、進学・就職についての意識が向上し、視野が拡大し、人脈を構築していると言いうことができるだろう。

## 6 まとめと今後の課題

調査 1, 調査 2 の間, 学生 A は筆者の担当する平成 26 年度教養教育基礎科目「海外短期研修」を履修していたが, その後 1 年間, 調査 3 までの間に筆者と学生 A が接する機会はほとんどなかった。この間, 学生 A は自力でリエントリーショックから回復し, 海外志向・上昇志向へと動機が高まったものの, 調査 3 から帰国後の一時期に理想と現実ギャップのある状態であったことが明らかになった。学生 A は自ら理想と現実のギャップを克服できたが, すべての学生がそうとは限らない。今回は研究の一環として学生 A のフォローアップを実施したが, 野水・新田(2014)の「留学の効果や影響は, 帰国直後だけではなく, 進路選択や就職活動, 社会人として活躍する中で表れてくる」という指摘および本稿の学生 A の事例から考えるに, 帰国直後のフォローアップだけでなく半年後, 1 年後といった長期的なフォローアップが必要であると考え。

本稿では, 野水・新田(2014)の指摘から着想を得て, 短期留学前後の比較および 1 年後のフォローアップ調査を行ったが, 短期留学前後と 1 年後の調査目的が異なっている。調査対象者のライフステージに沿ってはいるものの, 3 回の調査に一貫性が見られないという問題点がある。短期留学の前後で進路選択に関する変化がないとは限らず, また, 1 年後に異文化理解に関する気づきが起これないとも限らない。今後は, 長期的なライフステージの変化に対応するよう調査計画を立て, 一貫性のある調査を行いたい。本稿で採用した PAC 分析を引き続き利用するとすれば, 短期留学前後, 1 年後, 大学卒業後などのいくつかのライフステージを想定した上で, 全ての調査で共通して使用できる刺激文を準備する必要があるだろう。

## 【参考文献】

足立恭則(2015)「語学留学の成果に関する意識調査(語学プラス $\alpha$ の語学留学の可能性を探る)」『グローバル人材育成教育研究』第 2 巻第 1 号, 31-42

URL <http://www.j-agce.org/wp-content/uploads/2016/01/2015-1.pdf#page=37> (最終閲覧日 2018 年 2 月 9 日)

佐々木良造・尾沼玄也(2015)「日本人学生の海外学習体験を PAC 分析で可視化する」『第 21 回大学教育研究フォーラム発表論文集』, 302-303

佐々木良造・尾沼玄也(2016)「短期留学経験がキャリアデザインに与える影響」『第 22 回大学教育研究フォーラム発表論文集』, 302-303

徳井厚子(2002)「短期語学研修におけるコミュニケーション意識とイメージの変化ーユタ大学夏期英語研修プログラムの事例ー」, 『信州大学教育学部紀要』第 107 号, 25-33

土田義郎(2017)「PAC-assist2」

URL <http://www.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm> (最終閲覧日 2018



年 2 月 9 日)

独立行政法人日本学生支援機構 (2016) 「平成 25 年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」

URL [http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_s/2014/index.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2014/index.html) (最終閲覧日 2018 年 2 月 9 日)

独立行政法人日本学生支援機構 (2016) 「平成 26 年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」

URL [http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_s/2015/index.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2015/index.html) (最終閲覧日 2018 年 2 月 9 日)

独立行政法人日本学生支援機構 (2017) 「平成 27 年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」

URL [http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_s/2016/index.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2016/index.html) (最終閲覧日 2018 年 2 月 9 日)

内藤哲雄 (1997) 『PAC 分析実施法入門: 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版

中川典子 (2012) 「短期海外研修プログラムにおける参加者の「学び」—その意義と長期留学への期待—」, ウェブマガジン『留学交流』

URL [http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2012/\\_icsFiles/afieldfile/2015/11/19/nakagawanoriko.pdf](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2012/_icsFiles/afieldfile/2015/11/19/nakagawanoriko.pdf) (最終閲覧日 2018 年 2 月 9 日)

中橋真穂 (2015) 「理工系大学院生のグローバル人材育成に向けた短期海外研修 (— PAC 分析による参加者の意識変容に着目して—)」『グローバル人材育成教育研究』第 2 巻第 2 号 ⑤

URL <http://www.j-agce.org/wp-content/uploads/2016/04/7NAKAHASHI.pdf> (最終閲覧日 2018 年 2 月 9 日)

野水勉・新田功 (2014) 「海外留学することの意義—平成 23・24 年度留学生交流支援制度 (短期派遣・ショートビジット) 追加アンケート調査結果分析から—」『留学生交流』, 20-39, 独立行政法人日本学生支援機構

URL [http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/\\_icsFiles/afieldfile/2015/11/18/201407ryugakukoryu.pdf](http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2014/_icsFiles/afieldfile/2015/11/18/201407ryugakukoryu.pdf) (最終閲覧日 2018 年 2 月 9 日)

R Development Core Team. (2017) R: A Language and Environment for Statistical Computing, R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria.

URL <http://www.R-project.org> (最終閲覧日 2018 年 2 月 9 日)